

1. 不況期と高成長期の循環を対応か? 2
(宇野の個人)

2. 不況期の収縮をどう説明するのか?
例題、個別的に説明するの?

第1節 好況局面での再生産

・景気を規定するとき、まず好況と不況のどちらから取りかかるべきか。宇野弘藏 (1953)『恐慌論』をみると、序論について第1章は「好況」からはじまっている。その冒頭ではまず、「資本家の生産方法が社会に支配的に行われることになると、その発展はいわゆる景気の循環をもって行われ、しかもその循環は好況、恐慌、不況の三段階を繰り返すことになる。……しかしそういう三段階が繰り返さざれば、われわれはその究明をいずれの段階から始めるべきか、まずその点を明らかにしておかなければならない」[宇野 (1953)、(1974) p.95] と述べられる。宇野氏自身もここに続けてなぜ好況からはじめるのかを説明している。循環運動を論じる場合、各局面は相互に結びつきあっているため形式的にはどの局面から始めることも可能である。そこでこれから論じようとする課題にとり、いずれの段階からはじめるべきかをまず決めなければならない。

本報告が景気の規定を試みる目的は不況から好況への景気回復を論じることである。すると、好況からはじめるほか、不況からはじめて好況、恐慌と論ずる方法がとりうる。しかし、回復を考える場合には不況からはじめる景気循環論には難点がある。「回復」とは、ある状態が元の状態に戻ることである。すなわち、まず元の状態があり、それが別の状態へ変化し、さらに元の状態に復するという段階を経ねば回復を論じることはできない。景気回復にかんして言うならば、まず好況があり、それが不況を経たのちに再び好況に戻るという一循環を説いてはじめて回復を説明したことになるのである。それならば、景気循環の最初の検討は好況に向けなければならない。本報告は好況、恐慌、不況という流れの循環運動を論じるものではないが、循環を念頭に景気を規定するならば、まず元の状態、次にそこから乖離した状態の順に考えをすすめていくのがわかりよい。

そこでまず、この好況をどのように規定すべきかを考えてみたい。といっても、恐慌論の冒頭で好況がこと細かく規定されているというわけではない。凡そ冒頭での好況の説明は原理論での資本蓄積の運動の再説になっており¹、恐慌論で新たに加えられるのは好況そのものの説明というよりも、蓄積の進行にともないさまざまに発生する蓄積への障害にかんする説明である。恐慌論の中心課題から考えれば好況末期の内容は非常に重要だが、今回は不況局面に対置されるものとしての好況局面が検討の対象である。したがって、われわれの焦点は好況中期におかれる。すると、その内容は原理論で展開された資本蓄積の運動そのものということになる。そこで、この運動のなかから景気を規定するに適切な目安を探してゆく。

¹ 伊藤・置塩 (1987)「Ⅲ 投資の役割」の冒頭 (62-63 頁) をみると、この章は資本蓄積および投資決定にかんする章であるが、その要約の小見出しに「景気の上昇局面」とある。本文では、2 者の投資にたいする理解の相違が景気の上昇局面にかんする理解にどのような相違を生じさせているかが簡単にまとめられている。曰く、「置塩は景気の上昇局面の主要な特徴は、投資が必要増加率より大きい増加率で増加する結果、諸商品にたいする超過需要が加速される不均衡の累積過程であると考えている。／伊藤は景気の上昇局面は、労働力に対する需要が総労働力供給に近くなり失業率が著しく低下し賃金率の上昇が生じるまでは、諸商品の需給が全体としてはほぼ一致した均衡状態の継続過程になると考えている」[同 (1987) 63 頁。／は改行]。この内容は「Ⅴ 恐慌・景気循環」での 2 者の好況の説明と当然ながら一致している。

景気と再生産

2015年4月16日

塩見由梨 (M2)

はじめに

景気はなぜ、どのように回復するのか。あるいは、景気回復にはなにかが必要なのか。そうだとすれば、それは何なのか。これは恐慌現象の発生以来、そのメカニズムの理解と並んで人々を悩ませてきた問題である。

マルクス経済学の景気循環にかんする議論では、景気回復に政策の介入を必要としない。それは資本主義経済に内在する力による景気の循環運動を説こうと試みるものだからである。この試みは、古典派以来の、恐慌現象を外的要因から説明しようとする見方にたいして、それが資本主義経済にとって決して外生的なものではなく、むしろ内生的なものであるということを明らかにしてきた。

しかし他方で、恐慌を中心課題としてきた従来の取り組みは、景気回復までを一貫して考察するには不向きであった。恐慌を論じる際には、恐慌を境にしてその前後の状態を好況、不況と区別してきた。すると、不況から好況への転換を考える段になって、恐慌を抜きにした2つの景況の関連がはっきりせず、なにを以て回復したと言われるべきかの判断が困難だったのである。景気回復を考えるには、それが「何」から「何」に転換するのかということがまず明らかにされる必要がある。

そこで、本報告では景気の2つの状態、すなわち好況と不況をどのように規定できるのかを考えてみたい。その最初の手がかりとして、ここでは社会的再生産に注目することとした。以下では、まず従来の恐慌論・景気循環論において好況がどのように扱われてきたかを検討する。その上で、好況をどのような要素で規定するのがよいかを考える。第2に、恐慌後の不況がどのように想定されてきたか同様の関心にしたがって検討する。ただし、不況の場合には恐慌と不況の境界をどこにおくかという点からして論者ごとのちがいがあため、まずはその不況像を大きく2つにわけて紹介し、次に2つの見方の内でより好況との対置に適当なのはどちらかを考察する。そして最後に2つの状態の関係を考える。結論を先にまとめるに、好況と不況の関係は凡そ拡大再生産と単純再生産の関係として現れる。しかし、その拡大ないし単純ということがここではそもそも何の規模を指しているのか、2つの再生産過程はどちらも同程度の安定性をもつのか、安定的あるいは不安定な各過程はどのような場合に成立するのか。第3節では、このような再生産過程への疑問を通じて、好況と不況の関係を接近してゆきたい。